

早稲田大学大学院 創造理工学研究科

博士論文概要

フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究

Study on the Architectural Detail Design of the Wooden Remains
of the Nguyen Dynasty in Hue

申請者

六反田	千恵
Chie	ROKUTANDA

建築学専攻 建築史研究

2013年12月

序論 研究目的と方法

本論は、ベトナム中部の都市・フエに現存する阮朝（1802-1945）建築遺構群の年代考察を、建築形式と細部意匠から試みる研究である。現存する遺構群のうち60数棟が木造架構を主体とし、ケオ（登り梁）を用いた中部ベトナム独自とされる架構法が見られる一方、その命名や配置や装飾には中国歴代王朝、特に明清王朝の影響が強く表れているとされる。フランス植民地支配、第二次大戦中の混乱と8月革命、第一次インドシナ戦争開始に伴う遺構群の大規模な破壊（1947）、ベトナム戦争と、過酷な歴史背景を通じて維持されてきた阮朝の建築遺構群は、ユネスコ世界遺産登録（1993）によって広く知られるようになり、フエ遺跡保存センターを中心とした歴史研究と遺跡修復活動によって、危機的な状況を乗り越えつつある。しかし、一方で、現存する各遺構には棟札や墨書に準じる年代・工匠集団を示す記述が見あたらないこと、公開されている漢喃史料が20世紀初頭で終わっており、阮朝の終焉からHMCC設立までの修理改変内容が不明であるために、沿革記録に70年以上の空白期があること、などといった要因から、現存する各建造物の造営過程は不明瞭であり、建築史研究上の大きな課題となっている。

本論は、漢喃史料と現存遺構の比較から抽出した阮朝建築の建築形式を枠組みとして、細部意匠の年代的特色を考察する方法をとった。その準備として①阮朝建築の特色、②既知の沿革一覧、③史料読解から抽出した造営期（12期）について序論でまとめている。

本論第1章 「連棟、重梁、重簷、重層」による建築形式

『欽定大南會典事例（工部）』における建築概要の記述と現存遺構の比較から、梁行き断面を構成する「連棟、[重梁]、[重簷]、重層」という4つの要素の組み合わせによって規定される建築形式を明らかにした。[重梁]と[重簷]は中国『營造法式』にもその名が見られる「抬梁式」「重檐」に倣った概念であり、『事例』が編纂された嗣徳帝初期には概念として定型化されていたと推定した。

この建築形式は、各建築物の格式と種別によって規定されている。最も格式が高いのは皇城内各宮区・京城内離宮・皇帝陵寢殿区内の中心建物である[殿・廟]で、「連棟・[重梁]・[重簷]」とする。紫禁城区内脇殿、皇城内皇后皇太后居住宮区の中心建物である[殿]および郊外の歴代帝王廟は「連棟・[重簷]」にし、[重梁]は与えない。皇城内脇殿である配殿・從院・左右廡、および門・亭は「単棟」とし、「[重梁]・[重簷]」とするのは紫禁城乾成宮区正門のみ、[重簷]とするのは紫禁城区・太廟区・世廟区の脇殿のみである。皇帝陵寢殿区正門には「重梁」に準じた架構を与える。[閣・楼]は「重層」とし[重簷]に準じた格式を与える。章末に、漢喃史料から抽出した建築形式に関する記述一覧を掲載した。

本論第2章 連棟形式（[重簷]と[承霤]）

主殿建築に用いられる「連棟」は「正脊五間前脊七間」といった記述で示される。『事例』と遺構現状の比較から、この連棟形式が[承霤]と[重簷]によって

規定されていたことを明らかにした。[承霽]には透かし彫りを施した装飾性の高い母屋桁支持材を用いる。主殿建築以外では、水上建築である[榭]が棟を連ねる架構形をもつが、大梁を延長して各棟を繋ぎ、[重簷]と[承霽]を持たない。承霽部に天井を張って承霽架を設けない3棟があるが、それぞれ移築・改築等の建築経緯によるものと推定した。

以上の比較考察より[承霽]と[重簷]でつくられる連棟形式は阮朝期全体を通じて維持された、変わらない形式であることを示した。

本論第3章 「重梁」(部材構成、彫刻絵様構成、彫刻絵様要素、渦状紋の彫刻作法)

「重梁」および重梁に準じる装飾的な身舎部小屋架構を、部材構成型(6種)、彫刻絵様構成型(6種)、彫刻絵様要素(44種)、彫刻作法(3種26通り)という4つの視点から分類し、建築年代との関係を明らかにした。また、これらの組み合わせが作る彫刻意匠の年代的特色を抽出し、21棟の建築年代を推定した。

第1節では、部材構成型と建築年代の関係を明らかにした。板束型：嘉隆初期～明命初期、渦積型：明命中期～嗣徳初期、腕木型：嗣徳中期、渦腕木型：成泰期以降、板型：維新时期～啓定期、虹梁束型：建築年代との有意な関係が見られない。渦腕木型は3棟とも伝創建年と部材構成型から見た建築年代が異なる。

第2節では、彫刻絵様構成型と建築年代の関係を明らかにした。双龍型：嘉隆期～明命初期、唐草龍型：明命帝期～嗣徳初期、唐草若葉型：嗣徳中期～成泰期、太唐草型・新双龍型：維新时期～啓定期、雷渦雲型：保大帝期。また、双龍型から唐草若葉型までは「吐水龍＋双龍」の構成が維持されるが、その連続的な展開が成泰帝期に断絶し、維新帝期以降は「吐水龍＋双龍」構成の再解釈・再構成を用いた復古期に入ることを示した。

第3節では、彫刻絵様要素から、断絶期を成泰末期・延壽宮正殿の建築後、興祖廟を延壽宮正殿と同時期と推定した。具象的な要素を持つ新双龍型を太唐草型よりも後代・啓定帝期(特に啓定帝陵の建設期)、構成要素の不足がみられる雷渦雲型を保大帝期と推定している。

第4節では、すべての絵様構成型に共通する渦状紋に着目し、その彫刻作法と建築年代の関係を明らかにした。3種の大分類「玉型・縁型・玉尾型」と小分類26種を抽出し、大分類は「玉型」→「縁型」→「玉尾型」と変遷し、復古期に「玉型」「縁型」が用いられること、小分類のうち「雷」(明命期～成泰)「玉高」(嘉隆～)「縁反」の3種には年代的特色が現れていることを示した。

以上より、嘉隆期～明命初期：「玉高」な雲塊様の量感の表現、明命中期～嗣徳初期：「雷」紋による厳格な表現、嗣徳期：「雷」紋による厳格な表現と唐草若葉の変曲点の多い柔らかな表現が併存する分裂的な表現、成泰期：形式的で洗練された表現、維新帝期：鋭く深い陰影をもつ立体的表現、啓定帝期：具象的表現、保大帝期：簡素な表現へと、意匠が変遷していることを明らかにした。本章でとりあげた21遺構の建築年代の推定と、社会背景に関する考察を結論でまとめた。

本論第4章 各部（中央棟飾り、ケオ、〔承霽〕、〔承榮〕）

第4章では、外観意匠の要である中央棟飾り、中部ベトナム特有の架構形式をつくるケオ、連棟型建築をつくる〔承霽〕、腕木状の架構をもつ付庇〔承榮〕について、それぞれの史料記述と現状をまとめている。

第1節 中央棟飾り：中央棟飾りを現状から6種に分類し、史料と比較した。最も格式が高い棟飾り「金寶珠」は太廟・乾成殿・明命帝陵と紹治帝陵の寶城前楼に用いられるなど、格式に則った使い分けが見られたが、改変の多さから建築年代の考察はできなかった。また、各宮区入口において、前脊と正脊が重なり、前後の龍吻と中央棟飾りが一列に並ぶ「棟重なり」現象を明らかにした。

第2節 ケオ：ケオ木鼻の絵様分類5型の年代分布と〔重梁〕から抽出した建築年代に共通性が見られること、裳階部・最外周部の単体ケオが絵様彫刻をもつことを明らかにし、〔交架・架〕という用語の中国建築との比較から、連結型ケオがより起源が古く、直通型ケオは構造剛性を増すための後代の用法と推測した。

第3節 〔承霽〕：連棟形式の成立時期の鍵を握る〔承霽〕について、史料記述と現状から、多くの〔承霽架〕が復古期以降のものであること、〔承霽〕の形ができたのは少なくとも嘉隆中後期、用語として確立したのは明命末期と推定した。

第4節 〔承榮〕：〔承榮〕が史料において紹治3年に初出すること、表徳殿〔承榮〕に軒柱がないことから、〔承榮〕は紹治初期につくられた形式とし、各遺構（6棟）の〔承榮〕部建築年代を推定した。

本論第5章 遺構例（明成殿、肇祖廟）

第5章では、阮朝建築遺構群のうちもっとも初期と推定した2棟である、明成殿と肇祖廟について細部意匠の状況をまとめ、〔重梁〕彫刻意匠の年代的特色から、各部の建築年代を推定した。

結論

本研究によって明らかになった、主殿格建築すべてを含む19遺構の建築年代を研究成果としてまとめた。そのなかには、肇祖廟：裳階部は東西で建築年代が異なり、〔承霽架〕は20世紀以降、明成殿：多くの改変を経ているが〔裳階ケオ〕〔重梁〕〔承霽架〕が同時代（嘉隆中～後期）、太和殿：〔重梁〕は保大期、延壽宮正殿：〔重梁〕成泰末期、など新しい知見を多く含んでいる。今後各遺構の詳細調査によって他の遺構の建築年代についても考察を進めたい。

フエ・阮朝建築には、中国『營造法式』を連想させる建築物の種別や格式によって規定される建築形式があり、特に連棟型建築の前殿には〔承榮〕〔重梁〕といった華やかな装飾的架構が集中する。一方、正殿は中部ベトナム独自のケオ架構をもつが、その架構にはほとんど絵様彫刻が見られない。そして「棟重なり」が起こる時、正殿は前殿に隠れてしまう。阮朝建築の起源は遠い建築史上の課題であるが、細部意匠からはじめて中国建築との関係、中国建築や概念との関係を示す切口をかすかに示すことができたのは、著者の望外の喜びである。

早稲田大学 博士（建築学） 学位申請 研究業績書

氏名 六反田 千恵 印

(2013年11月 現在)

種 類 別	題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む）
a. 論文	フエ・阮朝建築遺構群の中央棟飾りの用法と配置 1. 王宮：ヴィエトナム・フエ阮朝王宮の復原的研究(その158)、日本建築学会関東支部研究報告集81(II)、2011年3月、 <u>六反田千恵</u> ・中川武
	フエ・阮朝建築遺構群の中央棟飾りの用法と配置 2. 皇帝陵：ヴィエトナム・フエ阮朝王宮の復原的研究(その159)、日本建築学会関東支部研究報告集81(II)、2011年3月、 <u>六反田千恵</u> ・中川武
	フエ阮朝建築遺構群における建築形式の分類：現存遺構と『欽定大南會典事例』における記述の比較考察、日本建築学会計画系論文集78巻688号、2013年6月、 <u>六反田千恵</u> ・中川武
	フエ阮朝建築遺構群における棟連結方法の分類：現存連棟遺構20棟を対象とした考察、日本建築学会計画系論文集78巻688号、2013年12月掲載予定、 <u>六反田千恵</u> ・中川武
	フエ阮朝建築遺構群における「重梁」の用法に関する試論：「重梁」の部材構成分類と現存遺構の造営過程、日本建築学会計画系論文集78巻688号、2013年12月掲載予定、 <u>六反田千恵</u> ・中川武
c. 講演	連棟型遺構「承榮」彫刻絵様分類：ヴィエトナム・フエ阮朝王宮の復原的研究（その177）、日本建築学会大会学術講演梗概集F-2、2013年8月、 <u>六反田千恵</u> ・中川武
	明命帝陵に関する史料記述比較 その2：ヴィエトナム・フエ阮朝王宮の復原的研究（その173）、日本建築学会関東支部研究発表会、2013年3月、 <u>六反田千恵</u> ・朝井達也・中川武
	勤政殿承露部の彫刻絵様について：ヴィエトナム・フエ阮朝王宮の復原的研究（その168）、日本建築学会大会学術講演梗概集F-2、2012年9月、 <u>六反田千恵</u> ・中川武
	フエ・阮朝王宮皇城圍繞壁及び各宮区圍繞壁の歪み：ヴィエトナム・フエ阮朝王宮の復原的研究（その166）、日本建築学会関東支部研究発表会、2012年3月、 <u>六反田千恵</u> ・中川武
	フエ・阮朝王宮皇城の配置中心軸：ヴィエトナム・フエ阮朝王宮の復原的研究（その167）、日本建築学会関東支部研究発表会、2012年3月、 <u>六反田千恵</u> ・中川武
	フエ・阮朝二連棟式遺構における前楹身舎の欄間装置絵様について：ヴィエトナム・フエ阮朝王宮の復原的研究(その162)、日本建築学会大会学術講演梗概集F-2、2011年7月、 <u>六反田千恵</u> ・中川武
	フエ・阮朝木造建築遺構群の中央棟飾りの分類と用法：ヴィエトナム・フエ阮朝王宮の復原的研究(その157)、日本建築学会関東支部研究発表会、2011年3月、 <u>六反田千恵</u> ・中川武
	勤政殿の前楹裳階ケオ・身舎大梁・ヴィ・ジャ・トゥの彫刻絵様について：ヴィエトナム・フエ阮朝王宮の復原的研究(その155)、日本建築学会大会学術講演梗概集F-2、2010年7月、 <u>六反田千恵</u> ・中川武（他2名）

早稲田大学 博士（建築学） 学位申請 研究業績書

種 類 別	題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む）
(c. 講演)	ドゥイ・ケオのプロポーションについて：ヴィエトナム・フエ阮朝王宮の復原的研究(その151)、日本建築学会関東支部研究発表会、日本建築学会関東支部研究発表会、2010年3月、 <u>六反田千恵</u> ・中川武（他2名）
	隆徳殿裳階部ケオの彫刻絵様構成について：阮朝・太廟・隆徳殿の修復計画(その20)、日本建築学会大会学術講演梗概集F-2、2010年7月、 <u>六反田千恵</u> ・白井裕泰・中川武
	両渦紋型ドゥイ・ケオ彫刻の先端渦紋の分類について2：阮朝・太廟・隆徳殿の修復計画(その14)、日本建築学会大会学術講演梗概集F-2、2009年7月、 <u>六反田千恵</u> ・白井裕泰・中川武
	両渦紋型ドゥイ・ケオ彫刻の先端渦紋の分類について：阮朝・太廟・隆徳殿の修復計画（その8）、日本建築学会大会学術講演梗概集F-2、2008年7月、 <u>六反田千恵</u> ・白井裕泰・中川武
	隆徳殿ドゥイ・ケオ彫刻絵様構成について：グエン朝・太廟・隆徳殿の修復計画(その2)、日本建築学会大会学術講演梗概集F-2、2008年7月、 <u>六反田千恵</u>
	フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究8意匠形状による大梁木鼻の分類：ヴィエトナム/フエ・阮朝王宮の復原的研究(その61)、日本建築学会大会学術講演梗概集F-2、2002年7月、 <u>六反田千恵</u> ・高野恵子・中川武（他4名）
	フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究6・元渦紋形状の分類：ヴィエトナム/フエ・阮朝王宮の復原的研究(その47)、日本建築学会大会学術講演梗概集F-2、2001年7月、 <u>六反田千恵</u> ・高野恵子・中川武（他5名）
	フエ・阮朝建築遺構群の細部意匠研究3・五鳳楼初層のドゥイ・ケオ彫刻絵様分類：ヴィエトナム/フエ・阮朝王宮の復原的研究（その38）、日本建築学会大会学術講演梗概集F-2、2000年7月、 <u>六反田千恵</u> ・高野恵子・中川武（他7名）
e. その他	『建築の言語 -ヴィジュアル版建築入門5』 「5.3.2. ヴォリューム-モラー邸」（ <u>六反田</u> 、pp.126-131）、彰国社、2002年9月、小嶋一浩・ヴィジュアル版建築入門編集委員会
	『再読 日本のモダンアーキテクチャー』 「13. 日本26聖人殉教記念館」（ <u>六反田</u> 、pp.161-174）、彰国社、1997年7月、モダニズムジャパン研究会（編集）
	『昨日のごとく一災厄の年の記録』 「神戸を歩いて東京を考える」（ <u>六反田</u> ）、みすず書房、1996年7月、中井久夫ほか8名